



立ち読み専用

立ち読み版は製品版を抜粋したものです。

ページ操作について

● 頁をめくるには、画面上の  (次ページ) をクリックするか、キーボード上の  キーを押して下さい。

もし、誤操作などで表示画面が頁途中で止まって見にくいときは、上記の操作をすることで正常な表示に戻ることができます。

● 画面は開いたときに最適となるように設定してありますが、設定を変える場合にはズームイン・ズームアウトを使用するか、左下の拡大率で調整してみてください。

● 本書籍の画面解像度には1024×768pixel(XGA)以上を推奨します。

茅 田 砂 胡 C D ブ ッ ク

デルフィニア戦記 シェラと西離宮の日々

茅田砂胡プロジェクト編



ウォル・ グリーク・ロウ・ デルフィン

——俺を笑い死にさせる気か！

27歳。大華三国の一つに数えられるデルフィニアの国王。先代国王ドゥルーワと馬屋番の娘ポーラとの間に生まれた^{しよし}庶子。出生が問題となり、ペールゼン侯爵を首魁とする“改革派”によって一度は玉座を追われるも、のちに奪還。現在は善政を布く王として知られている。黒い髪、黒い瞳。名だたる剣豪でもあり、端正な顔立ちと鍛え抜かれた豊かな長身は見事なまでの均整を誇る。独身。



花盛りの美しい季節になったが、国王にとっては頭の痛いことが続いていた。

誰よりも信頼している従弟が、言いがかりのような理由で自分の叔父との合戦を望み、かと思えば隣国タンガとパラストに何やら不穏な動きが見られる。

これだけでも気が滅入る話だが、そこにさらなる問題が発生したのだ。といっても、これに関しては国王は完全に傍観者を決め込んでいる。

もつとはつきり言えば、おもしろがつてすらいる。

今も本宮の陽当たりのいいテラスで、王女を相手にのんびりと話していた。

「ところで、おまえの侍女は元気か？」

「別に、おれのとってわけじゃないぞ」

先日、王女は初めて、身の回りの世話をする侍女を西離宮に通わせることにした。女官長はそのことをたいへんに喜んでいて、実情を知ったら肝を潰すに違いない。

国王に負けず劣らずのんびりした口調で、王女は言ったのである。

「よく働く奴だよ。侍女としても刺客としても」

「それは聞き捨てならんな」

国王は身を乗り出したが、論点が違う。

侍女に扮した刺客が城内にいること自体が既におかしいのだ。しかも王女付きの侍女である。

国王がそれを知りながら放置するなど普通ならありえない。

しかし、デルフィンニアの家臣たちの中でも国王に親しいごく一部の人々は知っている。

この国王に並の神経を求めても無駄だということ。

国王は王女と話す時に他の人間が側そばにいることを好まないで、茶を運んできた小姓こしやうが下がった後は二人きりだった。

だからこそ、こんな物騒な会話も平気でできるのである。

さすがに、城内の他の者に聞かせられないということくらいは二人ともわきまえているが、もともとデルフィンニアの国王と王女は義理の親子である前に、元気な少年同士の友人のような、何でも話せる貴重な間柄あいだからなのだ。

「夜中に襲ってきたのと毒を仕込んだのは聞いたが、他には何を仕掛けてきた？」

こういうことを真顔で王女に訊きく国王はアベルドルン大陸広しといえども二人としない。

しかし、王女の神経も並ではないので、平然と答えた。

「昨日は夜になってから魔法街に出かけただろう？ だから今日は遅くなるから、おれの帰りを待たずに本宮に戻っていいぞって言ったんだ」

「うむ」

「で、魔法街から戻っておまえとブルクスと話した後、おれは西離宮に帰った。もうほとんど明け方に近かったけどな。一眠りしようと思っただんだ。そうしたら……」

王女は呆あきれたように苦笑して、ため息を吐ついた。

「寝室に入れなかった」

「どうということだ？」

「あいつ、妙な小道具を使うんだよ。——刺客って、みんなああいうのを使うのかな？」

「小道具？」

「うん。小石みたいな礫つばてを投げつけてきたり。他に糸剃刀いとかみそりとでもいうのかな？ それが寝室の入り口に張ってあった」

歴戦の勇士である国王にとって人を倒す武器と言えば、劍、槍やり、弓矢などが一般的なので、理解が追いつかなかった。思わず問い返した。

「糸状の剃刀？」

「見ためは極細の針金みたいだった。西離宮の寝室には扉がないだろう？ だから両側の壁の漆喰しっくいに小さな鋸のこぎりを打ち込んで、ちょうどおれの顔があたる位置と、足下にぴんと張ってあったんだ。こんな仕掛けは昼間なら丸見えだけど……」

西離宮の造りを思い浮かべ、その場面を想像して、国王は重々しい声で言った。

「夜なら見えない。まっすぐ歩いて引つかかる」

「そういうこと。二本仕掛けたのは、足下だけだと偶然またぐこともあるからじゃないかな？ あれは危ないぞ。人間、慣れたところはいちいち灯りあかなんかつけない。自分の寝室ならなおさらだ。まっすぐ歩いて行って、気がついた時には顔や足がすばっと切れてる」

怖い説明をして、王女はちよつと笑ってみせた。

「おれはもともと夜中でも灯りは使わないけど。辺りあたが明るくなつてたのは助かった」

国王は低く唸った。

「笑い事ではないぞ。深夜だったら、まんまと引つかかっていたかもしれないではないか」

「それはないよ」

「おまえの夜目が利くのは知っているが、暗闇の中でそんな細い針金が見えるのか？」

「眼で見るのは無理だな。髪の毛みたいに細い上に黒く塗ってあるんだから、ほんと、手が込んでいるよ。夜なら絶対気がつかない」

危うく自分が引かかるところだったというのに、王女は感心したように話している。

「ただ、ああいうのは地面に仕掛けた罠と同じで、見えなくても足が勝手に止まるんだ。何しろ、あの針金には毒が塗ってあったんだから」

国王は椅子から飛び上がった。

「さわったのか！」

「ばか。さわってたら、ここでこうしておしゃべりなんかしてられるか」

呆れて言って、国王をなだめた王女だった。

「あの糸剃刀自体は、それほど危険じゃない。いくら何でも、あれじゃあ死なない。ただし、かすり傷でもつければ……」

「毒が回ってあの世行きか？」

「だと思っ。ほんと、物騒な奴だよ」

言葉と裏腹に、王女の口調は楽しそうだった。

一風変わった遊び相手をおもしろがっているのは間違いないさそうである。

当の刺客が知ったら恥辱に身を震わせるだろうと思いつながら、国王は真顔になって低く唸った。あの刺客の件は王女にまかせるつもりでいたが、いささか暢気すぎたかもしれないと

思い至つたのだ（遅きに過ぎるが）。

「リィ。何度も言わせるな。笑い事ではないぞ」

「あの離宮に住んでるのはおれ一人だ。他の人間が巻き添えになることはまずない。あいつはそう踏んで、あんな仕掛けをしたんだよ」

「そういう問題ではない。他人事ひとごとのように言うが、狙われているのはおまえなのだぞ」

「だから気が楽なんだ。おれは自分のことくらい自分で守れる。あいつの狙いがおまえだったら、それこそ穏やかじゃない」

これには顔色を変えた国王だった。

「ちよつと待て。聞き捨てならんな。それでは俺は自分の身一つ守れぬ男のようではないか」

「おれが言うまで、あれが男だつて全然気づいてなかったくせに何を言う？」

「それを言われると弱いが……、しかし、あれが男に見えるか!? どこからどう見ても清楚せいそな娘ではないか」

頭を抱えた国王の言い分もわからないではない。

問題の刺客すたかちの姿形は申し分ないからだ。肌は抜けるように白く、銀色の髪は艶つややかに長く、細い身体に清楚な女官の服装がぴたりと合っている。

身のこなしも実にしとやかで、優美ですらある。

誰だが見ても美しい娘だと言うだろう。

それなのに中身は十六歳の少年だというのだから、国王が嘆なげくのも無理はない。

王女も感心したように言ったものだ。

「だよなあ。他の女の子と比べても、めだつてきれいだもんな。顔だけじゃない。しゃべり方も、身のこなしにしても、女の子そのものだ」

「……まさにそれだ」

二つ三つの子どもなら男女の区別がつかなくてもおかしくない。

また『紅顔の美少年』という言葉に代表されるように、十二、三歳くらいまでなら、少女に引けを取らないほど美しい少年もいるだろう。

しかし、それは男として成長すると同時に自然と失われていくものだ。

自分自身を省みると、それがよくわかるのである。

国王は唸ると同時に、妙にしみじみと言ったものだ。

「……同じ男とはとても思えん。俺が十六の時にはそれこそ小熊こぐまのようだったがなあ……」

小さくて可愛らしかったという意味ではない。

もうだいぶ、むくむくだったのに、という意味だ。

「小熊の間違いじゃないのか？ 六歳ならともかく、今それだけ大きいんだから」

国王は王女の言葉には気を取られなかったようで、自分の意見を続けて主張した。

「正直、未だに信じられんが、だからといって、あの侍女に力劣りすると言われるのはいくら何でも心外だぞ」

デルフィンニアの国王ウォル・グリークは国内外にその名を轟かせた剣豪けんゆうである。

これに匹敵する騎士を探すのも、一対一の闘いで国王を倒すのも至難しなんの業わざだ。

弱冠十六歳の王女はそのことを誰よりよく知っていたので、あっさりと保証した。

デルフィニア戦記
シェラと西離宮の日々

CD制作リスト

ト ラ ッ ク

トラック1 10分55秒

トラック2 18分27秒

トラック3 03分22秒

総収録時間 33分

キ ャ ス ト / ス タ ッ フ

原作・脚本・監修：茅田砂胡

キャラクターボイス

ウォル：大川 透

リィ：桑島法子

シェラ：小林ゆう

カリン：百々麻子

ナレーション：百々麻子

スタッフ

音響監督：亀山俊樹

音響効果：武藤晶子

録音調整：加藤恵美

音響制作：グルーヴ

音楽：未来古代楽団（砂守岳央・松岡美弥子）

ピアノ・他：松岡美弥子（未来古代楽団）

プログラミング・ミキシング：砂守岳央（未来古代楽団）

プロデューサー：安藤 岳

★ご覧いただいた立ち読み用書籍はPDF形式で、作成されています。この続きは書店にてお求めの上、お楽しみください。